特集

三重の文学碑巡り

緑豊かな山々、青く輝く海、山と海をつなぐ川の清らかな流れ、そして各地域で懸命に生きる人々の姿…。三重県内を旅すれば、思わず感嘆の声をあげたくなる光景に出合います。

時には、心に留めた印象を、詩歌や俳句として結実させた方もいるのではないでしょうか？

今回は、三重県とゆかりがあり、美しい詩や手紙などを残した文化人を顕彰して建立された文学碑を紹介します。それぞれの文学碑を巡れば、意外な誕生秘話や、地域の人々との交流の様子なども垣間見えてくることでしょう。

※三重県内には、ほかにも数多くの文学碑が存在します。今回紹介するのは、ほんの一部です。

取材・文…中村真由美
撮影……梅川紀彦・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

伊藤 桂一詩碑（四日市市寺方町）

一度きりの奇縁から誕生した「桑名の驛」

中原 中也（1907～1937）詩碑【桑名市大字東方】

中原 中也詩碑

三重県の北の玄関口「桑名駅」は、JR東海の関西本線、近鉄の名古屋線、養老鉄道の養老線が乗り入れていることから、多くの乗降客で賑わいます。日々、駅を利用する中で、1番線ホームに建つ、大きな詩碑に気付いた方もいることでしょう。台座を含めると2・1メートルに達する碑を見ると、「桑名の夜は暗かった 蛙がコロコロ鳴いてゐた 夜更の驛には驛長が 綺麗な砂利を敷き詰めた プラットホームに只獨り ランプを持って立ってゐた」と、詩の1連目と、作者名が刻まれていることがわかります。

詩碑の下部には詩の全文が記されたプレートが設置されている。

詩のタイトルは「桑名の驛」。そして作者は、近代詩人・中原 中也です。明治40（1907）年に山口県で生まれ、京都で学生時代を過ごした後は、主に東京で詩人として活躍した中也ですが、桑名との関わりがあったのでしょうか？そこには、あるできごとがあったのです。

そのできごとは、昭和10（1935）年の8月11日に起こりました。中也は妻と長男との3人で、帰省中の山口から東京へと列車で帰る途中でした。しかし、関西地方では、前日の夜から降り続いた豪雨のために、大阪と京都間で列車の運行が不能になっていました。このため、中也たちを乗せた東海道線の上り列車は、関西本線を経由することに。夜中に桑名駅に停車したのは、まったくの偶然だったのです。

「桑名の夜は暗かった…と、何度も繰り返したのは、賑やかな様子を想像していた中也が、実際の駅の静かさとの落差に驚いたからでしょう」と教えてくれるのは、郷土史家の西羽 晃さん。長年、郷土の歴史を探求する西羽さんは、中也には東海道の宿場町として賑わう桑名についての知識があった筈だといいます。それは詩の2連目の「焼蛤貝の桑名とは 此処のことかと思ったから駅長さんに訊ねたら…」という表現からもわかります。しかし、駅は中心部から離れた郊外にあり、しかも、当時の出入り口は東口だけで、西側は一面の田んぼだったため、聞こえるのはカエルの鳴き声だけだったのでしょう。西羽さんは、この驚きが詩心を掻き立てたのだろうと話します。

除幕式に出席した皆さん※

詩碑製作者の吉村 壽夫さんのアトリエ

中也が、この世を去ったのは、わずか2年後のことでした。桑名に来ることは2度となかったのです。西羽さんは、一度きりの奇縁から誕生した「桑名の驛」の詩碑を建てたいと考えたといいます。そこで有志を募り、「中原 中也『桑名の驛』詩碑建設委員会」を結成。こうして平成6年、桑名駅の開業百周年記念に合わせて、除幕式が行われました。式には、中也の弟夫人、当時の「中原中也記念館」（山口県）館長も同席し、盛大なものとなりました。

「赤御影石の形態で、詩人として短い生涯を情熱的に生きた中也の詩心を表現しました。また、曲線と直線の対極表現で、車輪と開業百年という歴史の重みを具現化しています」と話すのは、国画会会員の彫刻家、吉村 壽夫さんです。詩碑製作の意図をアトリエで熱く語ってくれました。

「桑名駅」を利用する際は、東京方面を向いて建つ、詩碑をじっくりと眺めてみてはいかがでしょう。

お問い合わせ

桑名市文化協会
（桑名市経済環境部商工観光文化課内）
TEL 0594-24-1361

※印の写真は取材先から提供していただきました

故郷への溢れる想いが集約された「水車」

伊藤 桂一（1917～2016）詩碑【四日市市寺方町】

伊藤 桂一詩碑

丹羽 文雄（1904～2005）、田村 泰次郎（1911～1983）、近藤 啓太郎（1920～2002）は、いずれも四日市市出身の作家として知られますが、加えて忘れてならないのは、昭和37（1962）年に「螢の河」で直木賞を受賞したほか、時代小説・詩・短歌など、幅広いジャンルで活躍し、平成28年に99年の生涯を終えた伊藤 桂一です。

「平成21年の満92歳の誕生日に、生家の大日寺で詩碑の除幕式を行った時には、桂一夫妻も出席してくれました」と教えてくれるのは、志水 雅明さん。日本文藝家協会会員の志水さんは「四日市・伊藤 桂一顕彰委員会」の会長も務めます。同会は、詩碑建立の後も、会報紙「水車」を発行するなど、多彩な顕彰活動を続けています。

会報紙「水車」

ある秋の日、志水さんの案内で大日寺を訪ねると、まず「高角山大日寺」と彫られた大きな石に出迎えられました。武蔵坊弁慶が藤縄でくくって担いできたという伝承が語り継がれる「弁慶石」です。門碑としての役割を果たす「弁慶石」を後にして参道を進むと、やがて本堂手前で、青色の自然石に気付きました。これが、お話の詩碑。高さは台座を含めると1メートル程度。少し丸みを帯びた文字を見ていると、自然と優しい気持ちになってきます。

「ぼくはふるさとへ帰ったときに まだその水ぐるまをおぼえていた けれども向うはぼくのことなど とっくに忘れてしまっていて ゆるり ゆるり 薄のなかで まわっていた」

「文字は、自筆を拡大したものです。生前〝仏の桂さん〟と称された人柄を彷彿させるでしょう」と話す志水さんからは、謙虚で温厚な桂一を偲ぶ想いが伝わってきます。

大日寺本堂

詩碑の除幕式に出席した伊藤 桂一夫妻※

ところで、奈良時代創建とも伝わり、高さ3・14メートルを誇る大日如来坐像（市指定有形文化財）が安置されるなど、由緒ある寺の長男として生まれた桂一が、作家・詩人としての道を歩むことになったのは、なぜなのでしょう。それは、一家を襲った、ある不幸なできごとが発端でした。大日寺の住職だった父の玄信が、不慮の事故で亡くなってしまったのです。桂一がわずか4歳の時でした。そのため、残された家族は3年後に寺を出ることに。その後、戦争体験などを経て、主に東京で長く生活した桂一でしたが、故郷への想いは色あせることはなかったようです。「日帰りの旅」「帰郷」などの作品には、帰郷した際の複雑な心情を綴りました。当時、寺の近くにあった水車についても記されています。その内容は、「四日市・伊藤 桂一顕彰委員会」会員の加納 俊彦さんがまとめた「小説に描かれた大日寺」に詳しく紹介されています。

「小説に描かれた大日寺」

「どんなジャンルでも、桂一の作品には、自然の風景・草花・何気ない音などの情景が描かれているのが特徴です。少年のころに見聞きした、三滝川の流れや、寺の裏側にあった竹藪、参道に咲く彼岸花などの豊かで繊細な色彩や音に育まれたからなのでしょう」。志水さんのお話を伺いながら詩碑の側面を眺めていると、青く澄んだ水の流れが現れたような気がしました。

お問い合わせ

「四日市・伊藤 桂一顕彰委員会」
TEL 059-326-1970
（志水 雅明会長）

※印の写真は取材先から提供していただきました

祖母の言葉〝おいなされ〟と「彼岸花」の印象を認めた手紙

小津 安二郎（1903～1963）記念碑【津市大門】

映写機をイメージした形の小津 安二郎記念碑

日本三観音の一つに数えられる、恵日山観音寺は、全国から広く信仰を集め、〝津観音〟と呼び親しまれます。境内には、観音堂・五重塔・鐘楼堂・護摩堂などが並び建つ中、平成27年に新たに建立されたのが、映画監督・小津 安二郎の記念碑。3月に行われた除幕式には、女優の山本 富士子さんも駆付け、関係者とともに完成を祝いました。

小津 安二郎と三重県とのゆかりといえば、たとえば、10歳のころから家族と暮らした松阪市愛宕町や、旧制宇治山田中学校（現宇治山田高校）で学生生活を謳歌した伊勢市、同校卒業後の1年間を代用教員として過ごした松阪市飯高町が知られていますが、津市とも関わりがあったのでしょうか？

「実は、小津の母方の祖母が津観音近くに住んでいて、度々訪れていたのです。しかも、祖母のことを書いた手紙の内容が、映画『彼岸花』に深く関係しているのです」と教えてくれるのは、田川敏夫さん。平成26年に結成された「小津安二郎記念碑建立委員会」（現在は「彼岸花映画祭実行委員会」）会長の田川さんのお話通り、祖母・都志は、現在の津市美杉町の出身で、津中心部で茶業を営む中條家に嫁いでいました。少年時代の小津は、祖母の元を度々訪れ、当時、境内にあった映画館で映画を鑑賞したといいます。

そして手紙とは、昭和2（1927）年に、久居（現津市）の陸軍歩兵第33連隊に短期入隊した際、祖母の家に寄って一泊した時のことを友人宛に書き送ったもの。碑文は、この手紙を抜粋したもので「おばあさんが津の宿屋町に住んでいる。朝早く僕はおばあさんの前に久振りに両手をついて殊の外真面目に云った―行ってまいります。おばあさんは笑いながら―またおいなされ、僕はなんだか悲しくなった。おいなされ 又このつぎに 彼岸草」です。津の方言で「おいなされ（来なさい）」と話す祖母と小津との様子は、まるで映画のワンシーンのようです。

なお、最後に添えられた句の彼岸草とは、この時に電車から見て、印象に残ったヒガンバナのこと。日本映画大学学長で、日本を代表する映画史家の佐藤 忠男氏は、31年後の昭和33（1958）年に発表された初のカラー作品の題名『彼岸花』は、この時の記憶に根差したものだと、『小津 安二郎の芸術』に著しました。

多感な10代を三重県各地で過ごした小津は、大正12（1923）年に上京すると、映画監督の道を歩み続け、54作品をこの世に送り出しました。そして、昭和38（1963）年12月12日に、その人生に幕を降ろします。奇しくも、満60歳の誕生日でした。

小津映画に対する評価は、死後数十年経った今でも衰えることはありません。平成24年には「東京物語」（1953年）が、英国映画協会が10年に1度開催する「世界映画史上トップテン」で1位に輝くなど、世界中で高く評価されています。田川さんは、親子の情愛・人間同士のつながりなど、普遍的なものが描かれているからだと教えてくれました。

「世界のOZU」の足跡を辿るなら、津観音へも足を運んでみてはいかがでしょう。

小津 安二郎が足繁く通った映画館を模した「小津安二郎青春館」（松阪市愛宕町）
TEL0598・22・2660（金・土・日・月曜日開館）

津観音

除幕式の様子※

お問い合わせ

「彼岸花映画祭実行委員会」事務局
TEL 080-3647-4460

※印の写真は取材先から提供していただきました

鳥羽の漁村で医者として過ごした詩人の代表的作品「安乗の稚児」

伊良子 清白（1877～1946）詩碑【鳥羽市小浜町】

「安乗岬園地」内に建つ伊良子 清白詩碑

「志摩の果安乗の小村 早手風岩をどよもし…」安乗の小さな村で、岩がどよめくほど急に激しく吹き起こる風の描写から始まる詩のタイトルは「安乗の稚児」。作者は、伊良子 清白です。明治39（1906）年刊行の詩集『孔雀船』を代表する詩を刻んだ詩碑は、現在、県内に2基あります。

1基目があるのは、詩の舞台となっている志摩市阿児町安乗。国の登録有形文化財「安乗埼灯台」が建つ、「安乗岬園地」内です。志摩市文化財調査委員の尾﨑 亥之生さんにお話を伺うと、清白は、実際に安乗を訪ねて作詩したのではないとのこと。それでも4連目の「荒壁の小家一村 反響する心と心 稚子ひとり恐怖をしらず ほゝゑみて海に対へり」では、安乗の漁村の厳しい生活や、それにも関わらず沖に出ている両親と心が通い合ってニコニコしている乳飲み子の描写が、まるで実際の光景のようだと話します。なお、「稚児」ではなく「稚子」とあるのは、『孔雀船』の初版の表記によるものと教わりました。

「安乗埼灯台」

また、裏面の撰文は、清白の二男で作家の伊良子 正が記したもの。「（前略）自然と人間の対立、融和の絶唱は、未来永劫いついつまでも、人の心をとらえてはなさない（後略）」という文面からは、詩とともに清白を誇らしく想う気持ちが伝わります。

さらにもう1基を訪ねて、鳥羽市小浜町へ。小浜漁港に到着すると、陽の光を浴びて輝く海面に、ぽっかりと小さな島々が浮かび、一幅の画のようです。めざす詩碑は、近くの城山に鎮座する八幡神社へと続く階段を登った先にあり、「水底の泥を逆上げ かきにごす海の病 そゝり立つ 波の大鋸 過げとこそ船をまつらめ」と、2連目が刻まれています。ところで、小浜町と清白の関連とは何なのでしょうか？ それは、裏面の「設立趣意文」を読むとわかります。生前の清白と交流があり、『評伝 伊良子清白』の著者として知られる楠井 不二が記したもので、そこには、明治10（1877）年に鳥取県で生まれた清白（本名 暉造）が、故あって東京を去り、国内各地や台湾などを経て、大正11（1922）年に小浜村の村医として迎えられたことなどが記されています。転々と住居を変えたため、〝漂泊の詩人〟と称された清白は、以来、昭和20（1945）年に、現在の大紀町に疎開するまでの23年間を小浜の地で過ごしたのです。そして翌年、往診に向かう途中で病に倒れ、帰らぬ人に。生涯を終えたのも、県内だったのです。

鳥羽市小浜町に建つ伊良子 清白詩碑

「伊良子 清白の家」（国登録有形文化財）

「小浜の集落内で過ごした清白の住宅兼診療所は、現在『伊良子清白の家』として、市内『マリンパーク』にあり、ファンの方などが訪れています」と話すのは、鳥羽市教育委員会の文化財専門員である豊田 祥三さん。豊田さんからは、清白が医者として真摯に患者と接していたと同時に、詩壇の第一線から身を引いても、詩歌への情熱を持っていたことなども教わりました。

この春は、清白が愛した県内各地を巡ってみてはいかがでしょう。

お問い合わせ

鳥羽市教育委員会生涯学習課
TEL 0595-25-1271
志摩市教育委員会生涯学習スポーツ課
TEL 0599-44-0339

見事な風景と人々の営みを歌った一節が導く「五ヶ所湾小唄」

野口 雨情（1882～1945）詩碑【度会郡南伊勢町】

「南海展望公園」入口近くに建つ野口 雨情詩碑。
第13節「綺縹（きりょう）のよいの（ぢや）礫の育ち　情深いは伊勢気質（かたぎ）」

南伊勢町の東側一帯に広がる五ヶ所湾は、リアス式の海岸線が複雑に入り組み、その様子がまるでカエデの葉のように見えることから、〝楓江湾〟とも称されます。昭和11（1936）年、この風光明媚な五ヶ所湾を、ある詩人が来遊しました。野口 雨情です。

野口 雨情（本名 英吉）は、明治15（1882）年に茨城県で生まれ、昭和20（1945）年に64歳で永眠するまでの間に、数々の詩や童謡、そして民謡を世に送り出したことで知られます。中でも「七つの子」「十五夜お月さん」「青い眼の人形」などの童謡は、年齢に関係なく口ずさめる歌として、多くの人々に親しまれています。

大正時代を中心に数々の童謡を生み出し、北原 白秋（1885～1942）、西條 八十（1892～1970）とともに近代童謡の基礎を作った雨情は、同10（1921）年ごろになると、全国各地を訪れ、その土地で民謡を作るようになっていきます。五ヶ所湾を訪れた際には、毎日毎日、各地に出向いて、実際の風景を見聞きし、作詩したといわれています。移動には主に自転車や舟を利用したとのことですが、時には、土地の若者たちが担ぎ手となり、籠で山道を駆け上ることもあったと伝わります。こうして、17節で構成された「五ヶ所湾小唄」が誕生しました。

時は流れ、雨情の来訪から74年が経った平成22年、南伊勢町役場前に「五ヶ所湾小唄」の第7節「五ヶ所蜜柑の色づく頃にや　雨も黄金の色に降る」が刻まれた詩碑が建立されました。高さ約1・2メートルの碑のすぐ近くには、南伊勢町の木でもあるミカンの木が植えられています。ところで、町内各地をドライブしていて、所々で似たような自然石の詩碑に気付いたことがある人もいるでしょう。中には大きさや素材が違うものもありますが、これらは、昭和59（1984）年に、礫浦地区に第10節を記した碑が建てられたのを皮切りに、各地区に建てられ、役場前の碑で15基となったのです。そのことは、詩碑の傍らに建つ石碑にも詳しく説明してあり、最後を「このことは、日本で野口 雨情の詩碑のいちばん多い町の誕生と、南伊勢町が誇り高い文化の町へ発展することを意味する。願わくは、人びとこぞって雨情殊玉の詩碑をくちずさまれんことを」と締めくくっています。なお、15基の内の第4節「ここは五ヶ所　愛洲の城址　聞くもなつかし物語」を刻んだ碑は、昨年12月に「愛洲の館」敷地内に移設されました。

「大詩人である野口 雨情に、これだけのすばらしい民謡を作らせたのは、五ヶ所湾という見事な風景、そしてそこに住む人々が営々と培ってきた伝統ある暮らしや産業があったからでしょう」と話すのは、エッセイストで三重大学社会連携特任教授の川口 祐二さん。長年、同町の文化振興に携わってきた川口さんの言葉からは、町民であることを自負する想いが伝わります。

やがて季節は、水温むころ。この春は南伊勢町を旅してみてはいかがでしょう。野口 雨情の心を動かした風景と、人々の営みが刻まれた詩碑が、道案内してくれるかもしれません。

お問い合わせ
南伊勢町教育委員会事務局
TEL 0596-77-0002
南伊勢町観光商工課
TEL 0599-66-1501

南伊勢町役場前に建つ詩碑

切原の白滝近くに建つ詩碑
第７節「山にひびいて白瀧さへも水はくだけて花と咲く」

内瀬（ないぜ）地区に建つ詩碑
第16節「空の月さへ内瀬の湾の浜の小舟の中に照る」